

## se mettre à Inf.再考

### —先行研究の検証と仮説の提案—

佐々木 幸太

(関西学院大学大学院)

本発表では、日本語の「Vハジメル」、「Vダス」、「Vテクル」と、フランス語のcommencer à/de Inf., se mettre à Inf.に関する研究の一環として、se mettre à Inf.の特性を明らかにすることを旨とする。

動詞mettreで表す行為の主体をX, 対象をY, 行為後のYのありかたをZとすると、XがYをZに移行させることを次のように表すことがある。

(1) La clef qui trainait par terre? Je l'ai mise sur ton bureau.

Zは、(1)では空間的なありかただが、次のように観念的なありかたのこともある。

(2) Il ne faut jamais mettre son chat en colere.

(3) « Tu joues a la poupee? » elle m'a demande Louisetete, et puis elle s'est mise à rire.

(Goscinny, R. 1960, Le Petit Nicolas)

Zは、(2)では「怒っている状態」であり、(3)では「笑う状態」である。(3)のように、「ある行為をする状態」の場合は、à Inf.で表す。

Franckel (1996) をうけて、Saunier (1999 : 280) ではse mettre à Inf.を用いると次のような表現効果が生じると指摘している：

A) soudainete : Zは、突発的に開始する行為である；

B) incongruite : Zは、異常な行為（または好ましくない行為）である；

C) « pour de bon » : Zは、ようやく開始する行為である。

Saunierは、特にZを突発的な行為や場違いな行為として述べる場合に、se mettre à Inf.を用いやすくなると指摘している。一方、C) に関しては詳しい記述がなされていない。また、A)~C)のような表現効果がなぜ生じるのかは、十分に説明していない。

本発表では、se mettre à Inf.を用いる場合にA)~C) の表現効果が生じるのかを確認し、その要因を明らかにする。

そのために、1章でコーパスを用いて先行研究の指摘の妥当性を検証する。2章では、se mettre à Inf.の特性に関する仮説を提唱する。最後に3章で、se mettre à Inf.を用いる際の表現効果がどのようにして生じるのかを述べる。

なお、本発表では分析に、コーパスとして約800冊の小説と新聞や雑誌の記事を用いる。ただし、出典の記載がない例は、インフォーマントの協力で作成した例である。